

『コラボノート』で、学びを深める協働学習を

全国の学校現場では、これからの社会で必要とされる「協働的な活動の中で、自分の考えを自分の言葉で伝える能力」の育成を目指した協働学習への取り組みが始まっている。こうしたなか、子どもたち同士が教え合い学び合う学習をサポートする協働学習支援ソフトウェア『コラボノート』が評判を呼んでいる。そこで、導入した学校現場の活用から、その魅力を今回から3回シリーズで紹介する。

お互いの考えを共有して編集！ 男女ペアで新聞づくり

■協働学習の実践を見据えて



さいたま市立浦和中学校

さいたま市立浦和中学校（渡辺春美校長）は、市立浦和高校を母体に平成19年4月に併設型中高一貫校として新たなスタートを切り、今年度で6年目を迎える。その大きな特色は6年間を見通した体系的な学習活動にあるが、充実したICT教育環境のもとで情報リテラシーの育成にも積極的に取り組んでいる。

浅見正史教頭は、「校内LAN整備に加え、全教室にデジタルテレビと電子黒板を設置。また、生徒1人1台にノートパソコンを配備してeラーニングによる独自の教育活動MSU（Morning Skill Up Unit）を日課として展開し、英語・数学・国語の基礎学力向上に努めています」と語る。

さらに、「昨年度の2学期に生徒機をタブレットPCにリプレイスしたことに合わせ、今後のテーマとなる協働学習の実践を見据えて導入しました」と期待を

寄せるのが『コラボノート』だ。

『コラボノート』は、“ホワイトボードをネット上で共有する”というシンプルな発想から生まれたソフトウェア。その特長は、ノートや資料に「ふせん」を貼りつけるような感覚で誰でも簡単に使いこなせること。しかも、1つの課題に対して生徒全員が一斉に書き込みできることや、自分のパソコンから他の生徒の意見や活動がすぐに確認できるため、総務省のフューチャースクールを始め、協働学習に取り組む全国の学校で導入が広がっている。

「本校でも市教委の委嘱を受けたICT活用研究に取り組んでおり、その中で、協働学習は大きな柱の1つに位置づけています。実際に使い始めたのは昨年末からですが、協働の場づくりに役立てようと、今まさに各教科において実践が試されているといった段階です」と浅見教頭。

そんな1人、主任としてICT活用の研究を進める加藤英教諭は、「コラボノートの強みは、なんといっても同時に作業できること。自分が書き込んでいる途中でも、他のメンバーが新しく書き込むと、すぐにそれらの内容が反映されるので、情報を共有しているような感覚で編集作業が行えます。加えて、これまで



▲ 浅見正史教頭

その上で、数学でいろいろな解き方を引き出すときなど、生徒同士がお互いの回答を出し合い、話し合いながら意見をまとめていく授業に向いていると指摘した。



▲ アイデア出しに便利な「ふせん」機能
上画面は、4種類のポスターの感想をふせんで並べた例

■意欲的な姿勢を育むツール

では、実際に授業ではどんな活用がされているか。国語の授業で、『コラボノート』を活用した新聞づくりに取り組んだ須賀久美子教諭に話を聞いた。

ここでは、生徒1人ひとりがタブレットPCを活用。謎の多い法隆寺の国宝

のソフトウェアと比較して、作業した結果が反映されるスピードが圧倒的には速いため、時間の短縮にもつながります」と認める。

リアルタイムで離れた相手の情報を閲覧＆書き込み

「獅子狩文錦」のルーツを解明した研究家の話を題材に、男女がペアになって新聞記事にまとめることを課題にした。1つの資料から情報を読み取って解釈し、自分たちの考えや感じたことを整理して発信するのが、ここでのねらいになっている。

作業は、最初にそれぞれが『コラボノート』で新聞記事をつくり、次にお互いの画面を共有して、よりよい記事になるよう編集作業を進めていく。

「従来、こうしたグループ学習では模造紙を使うのが一般的ですが、手書きだと書き直しが面倒だったり、どうしても1人が中心になって進みがちになったりといった課題がありました。しかし、コラボノートなら、自分の考えをまとめた上で、お互いの意見を交換できるとともに、コンピュータ上で素早く手直しができるため、ストレスなく作業を進めることができます」とメリットを強調する。

なかでも、レイアウトを見ながら写真を貼ったり、活字の大きさやフォントも自由に変えたりできるので、決められた時間の中でまとめるのに作業しやすいことを実感したと話し、それが個々の能力差を縮めることにもつながっていると指摘。

「たとえば、字が汚いことをコンプレックスに抱える生徒もいます。コラボノートを使うことで、そんな心配もなくな

り、意欲的に取り組む姿勢を育むことができるようになりました」

また、実際に生徒たちが作った新聞を見ると、自分で描いたイラストを挿入する、手書きの文字を見出しに使うといった工夫も見られる。こうした点も、デザインの自由度が高い『コラボノート』ならではの魅力であり、使い慣れるほどオリジナリティが発揮されるようだ。



▲ 加藤英教諭と須賀久美子教諭
～コラボノートの画面を前に～

■作品の完成度が上がると生徒も評価

授業では、完成した新聞の一覧を生徒1人ひとりがタブレットPCで閲覧し、星取り採点を付けることも行った。自分たちの作品との視点や工夫の違いに気づかせる機会になるからだ。

また、元々記入されていた内容とは別のレイヤーにコメントを記述できる「アドバイス」機能も便利だと須賀教諭。「気になった生徒の作品にコメントする、課題が進んでいない生徒には指示するなどに使っています」と重宝してい



▲『コラボノート』なら、お互いの画面のデータを共有して編集作業が進められる。

ることを挙げた。

一方、このように作成したデータは校内で公開できるため、誰でも作品を閲覧したり書き込んだりすることもできるが、セキュリティ対策としてアクセス制限を設定することも可能だ。この点も、「他の学年は閲覧できないようにしたり、参考にさせたい場合は期限を付けて見せるようにしたりと臨機応変な使い方をしています」と答えてくれた。

最後に、『コラボノート』を使った授業の生徒の反応について須賀教諭は、「友だちと意見交換することで作品の完成度が上がっていくところが面白いと、全員が集中して取り組んでいました。グラフの挿入や動画など、ほかにも生徒の工夫によって効果的に使える機能がたくさんありますから、それらを使いこなしていけばもっと可能性が広がっていくと思います」と今後の取り組みに期待した。

さらに、「今年度はぜひ、総合学習で行う職業体験に活用してみたい」と意欲的なのが加藤教諭だ。「この授業ではクラスの垣根がなく、さまざまな職場を体験させるため、ネット上で情報共有して編集が進められるコラボノートの強みを生かすことができるからです」と話すとともに、学級目標を皆で話し合っ決めるときなどにも便利なツールになると、授業に限らずクラスのコミュニケーション・ツールとして幅広く活用していく意向だ。



コミュニケーション創造企業
株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェア

●商品の情報はホームページでもご覧いただけます。

<http://www.collabonote.com/edu/>

本社 香川県高松市浜ノ町8番24号 TEL (087) 821-4520

フリーコール **0120-999-687** (固定電話専用)